

# 勝林寺寺報

「報恩講」のおこりは、宗祖親鸞聖人がなくなつてから三十三年目、なわち三十三回忌の法事を勤めるに当たり、聖人の（ひ孫）にあたる本願寺第三代門主「覚如上人」が、先ず、「式文（しきもん）」『報恩講式』を書いて、聖人の功績やご遺徳を讃えました。そのうえ、聖人のご生涯を絵師に画かして、『本願寺の聖人親鸞伝絵』（一般には「絵伝」といいます）を作りました。

当時はまだ、世間一般には「浄土真宗」は知られておらず、むしろ旧仏教（比叡の天台宗や奈良の興福寺やまた貴族）などからは差別し嫌われ、いつも弾圧の嵐のなかにさらされておりました。この状況を打破排除して、ここに真宗ありと、いわば独立宣言をしなければならなかったのです。ここから『報恩講』は始まりました。

以来、本山では、（江戸時代になって東西の本願寺に分派し、以後十派に分れています）現在、お西では新暦で一月九日から十六日までの七日間。お東では旧暦で十一月二十八日から一週間、「お七昼夜」（おひちゅうや）と称して、年中重要な法要が続けられてまいりました。

末寺やご門徒でも、ご本山の法要以前に『お取り越し』と称して、やはり年中重要な行事として今日まで続けられています。

如来様に見守られ、親鸞様にいつも呼びかけられ、その御恩のなかに過ごさせていただいている身のしあわせを、あい寄りあい語りあって勤めるのが「報恩講」です。

勝林寺でも、現在は例年、十一月二十一日・二十二日に、これを皮切りに以後来春まで、すべてのご門徒の家々で「報恩講」を漏れなく勤めて参ります。

## いじめ

ほうぼうの小中学校や高校・養護施設などで「いじめ」が問題になっている。

「いじめ」に関連した「自殺事件」まで起きたりして、特に、直接関係の教師や父母だけではなく、校長・教育委員会・PTA役員、はては、市町村の首長までがその責任を問われている。いまや日本の教育そのものが問われているとみていい。

「自殺」が起きた。そのときいじめと自殺との因果関係が問われるが、多くの場合、いかにも歯切れがよくない。

自殺に追い込む明確な意図があつて「いじめ」をしたのではないという。単なる「冗談で」・「遊びで」・「ただカラカッタだけ」・「たしなめてやっただけ」。ただそれだけなのだ。自殺なんてしやがって、かえってまわりが迷惑している。「いじめ」と「自殺」には必然的な因果関係は認められない。関係ありとしても「偶発的」結果でしかない。いじめた側や、学校など教育管理の側は、いつもこのように云つて責任を逃れようとする。

この論理線では、自殺は、ただ個人的・恣意的・偶発的でひとりの被害妄想的な思い込みのうへの気ままな行動でしかない。はた迷惑この上ない！

家で、学校で、こんな事故が起こったりしたのは、悲しいことではあるけれども、これはどこに（だれに）責任があるとか落ち度があつたわけではない。いろんな人間の集まる「集団」のなかでは仕方のないこと。ありがちなこと。

こんな考えかたがどうも一般的なようだ。しかし、現に一人のいのちが失なわれている。この現実。これを、「仕方のないこと」

「偶発的なこと」と済ませていいものか。わたしは、今までに関わってきた養育施設の日々のなかで経験し学んだことをもとにして考えてみた。

どの集団・教育機関でも、おなじ生徒・メンバーとひとくくりにしても、個々の個性は千差万別。いわば個性の集まりである。知的・体力的能力はもちろん・生育歴や家庭環境など個々別々。従つて感受性もバラバラ。

一つの統合原理では到底まとまるはずのないもの。クラスなり訓練集団はいつでもどこでもそのようなもの。これをひとりの教師の教育理念や学識で括ろうとする。軍国主義教育ならいざしらず。すくなくとも近代民主教育では出来ない相談かもしれない。

従つてここでの統合原理は、「仲間意識」。「みんな違つても同じ仲間だよ」。「みんな違つて みんないい」。これだとわたしは思う。

たとえばいま仮に、「知的障害者養育施設」と呼ばれてきた作業所についてみても、一般に心的機能失調と云つても、個々無数の様態のあることは殊に指導員ならすでに研究熟知されているはず。

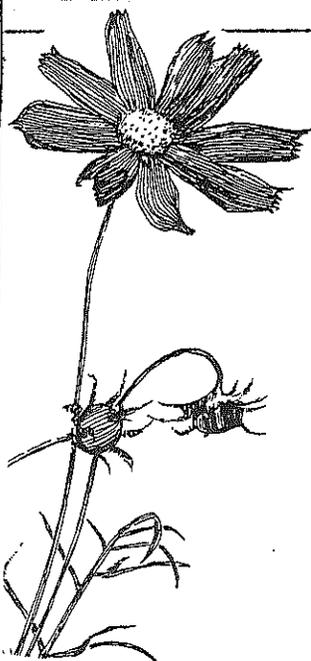
学習障害・機能障害・てんかん症・コミュニケーション障害・アスペルガー症候群、鬱の人、燥の人。その他もろもろ。

一応わたしもこれに関する図書を読んでみた。結果、わたしは「これは人ごとではなく、どの症状も私のなかにある」「みんな同じ仲間！」という感動であつた。どのメンバーもわたしと血を分けた兄弟という「近親感」「同朋感覚」であつた。

ところがその後 日々のくらしのうえで感じたことは、「仲間のあいだの相剋」（せめぎあい）。

どうしても仲間とのコミュニケーションのとりずらい人もいる。人びとの話題や関心についていけない人もある。作業も人と同じ歩調に進まない人もある。これらの人が互いに思いやり暖めあつて生きていきたいものだと思念して止まない。

「いじめ問題」が横行する社会で、このわたしたちの施設がこの社会の「師表」（お手本）になるよう願つて止まない。



## 十一月 勝林寺 予定

三日（土）	光頭寺 報恩講
四日（日）	坂本光隆宅 一周忌
五日（月）	石田和俊宅 一周忌
九日（金）	組長会
九日（金）	正福寺前坊守様 一周忌
一〇日（土）	正福寺 報恩講
一〇日（土）	本覚寺 報恩講
一四日（水）	西方寺 報恩講
一五日（木）	福成寺 報恩講
一七日（土）	おみがき奉仕
一八日（日）	森友敏裕宅 一周忌
二一日（水）	勝林寺 報恩講
二二日（木）	勝林寺 報恩講
二三日（金）	横山一夫宅 一周忌
二四日（土）	正法寺 報恩講
二五日（日）	正法寺 総仏講
二六日（月）	みのりを聞く会 七時半より
二七日（火）	佐田・奥栗尾 報恩講
二八日（水）	口栗尾 報恩講
二九日（木）	保谷・日殿 報恩講
三〇日（金）	奥小谷 報恩講

（敬称略）

# 縁起の法

「お釈迦さま」という人は、紀元前五世紀半ばごろ、インドのヒマラヤ山麓のシヤカ族の小国に、その国の王子として生まれました。

二十九歳のころ家を出て一人苦行の旅をしました。三十五のとき、ブダガヤというところの菩提樹の下で悟りをひらいてブッダ（目覚めた人）となったと伝えられます。以後インド各地を遊行（びんぎし）し、悟った真理（法）を広めました。その彼の教え広めた真理とは、縁起の法だといわれます。

「縁起」とはどんなことでしょうか。「因縁生起」（いんえんせいぎ）すべてのものごとくは、直接原因・間接原因、数えることのできないほどの原因と条件によって成立する。逆にいえば何事も何物も、他との多くの関わりなく単独で存在するものはない。この関係性・関連性を見失って（これを無明（むみやう）といいます）、一つの主体・自我にこだわる（これを渴愛（がくあい）といいます）。このふたつが煩惱（ぼんごう）とも（根本煩惱）といい、苦しみ悩み・混乱の根源です。

一つの典型的な例を挙げてみましょう。「家柄」「血筋」ということで、つい自己中心的な観点から、自分の身分や家柄を誇り、卑下したり。また、人を見下げたり差別したりします。これが比較・競争・差別・戦争のタネになっています。

仮にいま、あなたの「祖先」をたどり数えてみてください。一代まえで二人。2代前は4人……と数えると、二十代まえなら百四万人。三十代前になると総計では二十四億人余になります。このうち一人が欠けても今のこの私は存在しなかったはず。こんなに多くの祖先のうちには各種いろいろな方がいたに違いありません。武士もあれば盗賊もいたかも知れません。皇族もあれば乞食もいたはず。しかも、狭い国日本です。誰の血統もどの家筋も、どこかで絡み合いまじりあっているはず。わたしの血筋は源氏の血統。万世一系の皇族の血筋など、ある訳がありません。

ん。云わば、誰の血筋も家柄も、絡み合ひもつれ合って、日本全国、いわばみな親戚、同胞（兄弟）です。

インドは格別に「カースト制度」（四姓制度）（フラーフマナー・セツテリ・バイシャ・スードラ）（司祭者・王族・武士・庶民・賤民）といて厳しい階級差別社会でした。しかもそのうえ「輪廻転生」といって生まれ変わってもその階級から免れることは出来ぬと信じられていました。スードラ賤民は生まれ変わってもいつまでも賤民。

現代でもインドにはこの制度は厳しくおこなわれているそうです。お釈迦さまはそのような社会の現実に反発して「真実をみよ」と立ち上がったとも言えます。それが彼の説いた「縁起の法」です。

お釈迦さまが亡くなって後、弟子の学者たちがいろいろな立場からこの教えを理解し体系化し理論化しました。四種縁起・十二因縁・アラヤ識縁起・重々無尽縁起などです。

中国の人達は「一樹の蔭に宿り、一河の流れを汲むも 多少の縁。」（この場合多少とは多いということ）などと表現しました。日本では「袖ふりあうも多少（多生）の縁」「縁は異なるもの味なもの」などということわざを生み出しました。

「この人と、親子となった。夫婦となった。これは単純な偶然なことではない。親子の・兄弟の・また夫婦の出会いに、不可思議な縁を思い、この出会いの重み責みに合掌する。そういうひとときをわたしたちは生活の中にもちたいものです。

日本の昔の人々は、理論理屈としてではなく日常のくらしのなかで、日常あいきつことばのなかに、この仏教の教える「縁起の法」を表現してきました。

「ありがたう」。有ること難たし（私が私であること。あなたと親子であり夫婦であることは、並々でない不思議な縁です。出会いの貴さ。絆の不思議さを喜んだことばです）

「しんじんにちりは」今日のこの出会いの不思議な縁を喜びました。

「もったいないない」（勿体、モツタイは、漢音ブツタイの宋時代の発音ではモツタイ）。わたくし・個我・自分の力。かいしよはなにもないのに、数知れぬ因縁のお陰ですという個我否定。自我否定。因縁の不思議さに感謝する心。

「お蔭げさまで」。くだん気がつかない蔭の恩、因縁を感謝しました。ちなみに「因恩」とは、わたしの心（いのち）をささえている因縁（ミナモト）。浄土真宗の宗歌は

如来大悲の恩徳は、身を粉にしても報すべし

師主知識の恩徳は、骨を砕きても謝すべし

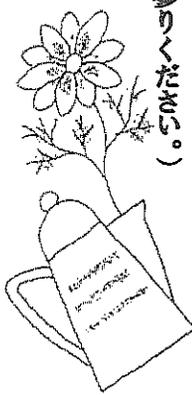
わたしの力では、渡ることも乗りまわることできない煩惱濁世のこの荒海に漂流しているこのわたしを、救い取らうと働いて下さる大いなる船のような如来様。

はてしない暗闇のなかを、独りよがりの足取りでさまよい歩くわたしの行く手に、誰にも遮（さ）げられない、智慧の灯火をかかげ、照らし導いてくださる如来様（南無阿弥陀仏）の恩にこたえさせていただきます。それが浄土真宗です。と親鸞様はその著者『顕浄土真実教行証文類』の冒頭に云っておられます。

## 十一月二十一・二十二日に

### 報恩講が動まります！

今年を送迎バスは、二十二日午前に運行されます。足元の明るい時間帯です。ぜひ、ご利用ください。（二十一日夜の運行はありません。マイカーでお参りください。）



## どすん

紙面の記事が足りないところを埋めるつもりで、何気なく書いたコラムが、意外にも多くの方に読まれていることにすっかり気をよくして、寺報の中にコーナーを設け、毎月続けることにしました。

コーナーの名前は「どすん」に決めました。私の大好きな言葉です。以前永代経のお説教に来てくださった吾勝先生のお話に由来しています。

「寺」という字は、二つの漢字が組み合わさって出来ています。上は「土（ど）」、下は「寸（すん）」、すなわち寺は「どすん」です。つまり、寺に来たら、どすんと座りましょう。寺は、どすんと座るところなのです。だって、「わたしの寺」「うちの寺」なのです。誰でも「わたしの家」「うち家」に帰ったら、何を遠慮することなく、どすんと安心して座るでしょう。寺だって同じことです。わたしの寺に来たら、安心してどすんと座り、聴聞し、みんな一緒に仏の道を歩ませていただきます。と。わたしの理想とする寺の姿を現した言葉が「どすん」なのです。

先日「敬老報恩講」には、八十余名の皆さんが、本堂にどすんと座り、みんなで正信偈をお勤めしました。そして、さらにどすんと座り直し、仏仕仏婦役員の演技に笑い転げ、ともに歌い、日舞に見入り、住職の歌と演奏に聞き入り……みんなでいい時間を過ごしました。来る十一月二十一・二十二日には、報恩講が動きます。また、本堂にどすんと座り、一緒に勤めたいしましょう。いっしょに聴聞いたしましう。いっしょに美味しいお齋をいただきます。わたしのお寺で。うち家のお寺で。

（文責坊守）